

敗戦後80年・原発震災後14年・放射能汚染土からの視点

平井 由美子

10年前、『季刊ピープルズ・プラン69号』で「敗戦後70年・原発震災後4年」という特集が組まれた。タイトルはここから頂戴して、現在私が関わっている放射能汚染土問題をプラスした。

福島原発事故をきっかけに「原爆と原発」を巡る多数の考察がなされ、マンハッタン計画から「核の平和利用」へと転換していく過程が広く知られるようになった。この年、『季刊運動（経験）』『Impaction』などの雑誌もまた特集を組み、当時の安倍政権へと至った「戦後復興」のプロセスを見つめ直す試みが行なわれた。

今年亡くなった村山富市元首相が敗戦後50年の1995年に出した「村山談話」は、日本の「侵略と植民地支配」を認め、公的に「謝罪」したものだ。

1991年に日本軍「慰安婦」制度の犠牲とされた金学順さんが自ら名乗り出た。支援する運動が女性を中心に広がり、2001年に女性国際戦犯法廷を取り上げたNHK番組への政治介入事件と改ざんが起こる。この介入の中心人物が安倍晋三元

首相であり、2006年教育基本法の改悪に奔走し、敗戦後70年の「安倍談話」へと繋がっていく。言わずもがな高市早苗首相はこの安倍を継承し、幼い頃に両親が繰り返し教えてくれたのは「教育勅語」だったとネットで公表した。

水島たかしは『季刊運動（経験）30』で、〈90年代の「自由主義史観」問題から小林よしのり『戦争論』など、若者の「新国家主義」への傾斜が指摘された流れの中で、拉致問題での「北朝鮮」バッシングが拍車をかけ、小泉純一郎、安倍晋三が、「北朝鮮」や中国などへの「敵意」を煽動することとで、自政権の対米従属や貧困・格差社会といった現実を覆い隠してきた〉と指摘している。これは現在のクルド人バッシングに繋がり、この夏の選挙での参政党の躍進に結びついた。

「在日朝鮮人や外国人への特権を許さない」と排外主義的な言動を声高に叫ぶ「在日特権を許さない市民の会」（在特会）は2007年頃から現れ、新宿・大久保の街頭や京都の朝鮮学校などで聞くに耐えない

罵倒（ヘイト・スピーチ）を繰り返していた。天皇制に異議を唱えるデモや集会への妨害行為は凄まじいものであり、現在も続いている。在特会の桜井誠と笑顔の高市早苗が収まる写真がメディアに流されている。

このような社会情勢の中、2011年3月11日に東日本大震災がこの列島を襲い、それに続く福島原発事故によるメルトダウが起こる。そして2022年12月、当時の西村環境大臣は「中間貯蔵施設」にある福島で生じた除去土壌（放射能汚染土）を、環境省の管轄である新宿御苑（新宿）、環境調査研究所（埼玉）、国立環境研究所（つくば市）に持ち込み、再利用実証事業を行なうことを発表した。

この国では説明責任を果たすべき側が、対象者も人数も方法もすべて決定してしまふ。そしてその限定された対象者にしても各人に告知はなされず、それどころかなるべく知られないような姑息な手段が取られる。新宿の場合、該当者となる私と連れあいはその住民説明会がすでに行なわれた後で、このことを新聞の記事で知ったのである。すぐに住民説明会で抗議行動を行なった方々と合流し、「新宿御苑への放射能汚染土持ち込みに反対する会」を発足させた。「市民の意見No.206」で、正野淳子さんが「土壌汚染の『復興再生利用』をگری押

しする環境省の脱法行為」というタイトルで投稿されている。参照されし。

現在、この汚染土問題は内閣官房が統括し環境省は窓口になった。さらに「福島県内除去土壤等の県外最終処分の実現に向けた復興再生利用等の推進に関するロードマップ」が示される。「復興再生利用の推進」「県外最終処分に向けた検討」「理解醸成・リスクコミュニケーション」の3つの項目からなる。そしてこの進捗状況については、IAEAのフォローアップを受けるとともに、国内外に対して透明性高く情報発信を行なう。そして、中間貯蔵施設の跡地利用等についても検討していくとある。菌の浮くような綺麗事である。

このロードマップに新宿御苑の文字はない。しかし環境省への聞き取りで、2段階目の搬出先に位置付けされていることがわかった。環境省は受け入れ自治体である新宿区にこのことを通知していない。

「30年中間貯蔵施設地権者の会」会長の門馬好春さんは『未来へのバトン』（インパクト出版会）で、何度も「国は約束を守れ！」と訴えている。約束とは借りている土地を戻すということである。他人の土地の利用法を、なぜ国が検討するのか。国が買い上げた土地もあるという。しかし、地権者、売却した方々の苦渋の決断がここでも蔑ろ

にされている。

「実証事業」の結末もはつきりしないまま、「再生復興利用」へといつの間にか移行しているのである。「除去土壤」は「再生復興土」と命名された。何度も行なった環境省との聞き取りで、お粗末だったにせよ、担当者が説明してきた内容は一体何だったのだろうか。初めから結論ありきの事柄に、辻褄合わせとも言えないような回答がなされただけである。

東京といっても広い。新宿御苑から400メートルほど西へ行くとLGBTQの人々が集う新宿2丁目。その少し東に行けば新宿駅。90年代に西口広場には多数のダンボールハウスがあり、野宿労働者の闘いがあつた。今でも、都庁や中央公園の周辺には路上の生活を余儀なくされている人々がいる。北側には歌舞伎町があり、行き場のない少女、少年が集う。その奥には大久保公園。身を売るために立っている少女たちがいる。大久保に行けば在日韓国・朝鮮人の方々の店が沢山あり、前にも触れた在特会が口汚い言葉を吐きながらデモをした。今もニューカマーの店が立ち並び、韓流ファンで賑わっている。

支配する側とされる側。搾取する側とされる側。この構図を見誤ってはいけない。手を差し伸べるべき者たちは見捨てられ、

利権を貪る者たちは肥え太る。原発の安全神話を信じるしか選択肢がなくて、原発が造られた貧しい土地柄。貧困と格差はこの国を覆っている。それは原発立地にされた地方だけではない。この東京という一見きらびやかな世界の下で、見えなくされながら懸命に生きている人々もいる。「国民」の外側で選挙権もなく、支援も受けられず差別に怯えながら、多くの「外国人」たちも共に生活している。

原発を国策として推進してきた国も、事故を起こした東電も誰も責任を取らず、罰せられることもない。彼らにとつては「福島で作られた電気は東京で使われていた」というフレーズは、原発事故の責任の所在を目くらましにし、責任転嫁するには実に都合がいいだろう。

川村湊は『原発と原爆 「核」の戦後精神史』（河出ブックス）で以下のように書いている。

「原発で底辺での労働者が被曝に晒され、放射能障害に苦しみ、それでも貧しさのために働かなければならないのは——原子力産業、原子力ビジネスで利益を得ている「原子力マフィア」と称すべき人間たちが、そうした犠牲者を生み出し、それがあたかも、電力の消費者が「悪」であるかのように責

任を転嫁しているだけだ。——真実は歪められ、現実には糊塗され、私たちはその怪物たちの欲望に犠牲の子羊たちを、ひれ伏して捧げるという愚行を繰り返している」。

柴田優呼『『ヒロシマ・ナガサキ』原爆神話を解体する』（作品社）は、広島と長崎が原爆で爆撃されたにも関わらず、そのヒロシマの地から「核の平和利用」が推進されていった過程を丁寧に読み解いた。隠蔽された日米共犯関係は、アメリカの罪を免罪し、日本を原発立国へと突き進ませる。

これは10年前に刊行された本だが、柴田は事故から4年が経つ福島についても触れ、「放射能の影響を軽視する語りが継続する可能性が高い。それどころか、事故の影響が語られなくなる可能性すらあるのである」と予見している。原爆の爆撃による原爆症で苦しむ人々を救うこともなく「原発安全神話」が形成されていくのと同じ手法で、80年という時を経た今、原発事故で生じた放射能汚染に怯える福島の人々を救うこともなく、新たな「放射能安全神話」が形成されようとしている。

また、加藤一夫は『季刊運動（経験）34』の「ビキニからフクシマへ」という投稿の中で、ヒロシマ・ナガサキが原爆によって爆撃されたという戦時下という状況

ではなく、戦後のビキニ事件で体験した日常生活での被曝体験、隠された歴史的体験の解明をフクシマの被曝体験と結ぶべきと提言している。生活レベルで非日常的な位置にある核兵器廃絶運動とは違い、原発廃炉運動は、地域の生活そのものと密接に関わっているとも加藤はいう。ロシアはウクライナへの侵攻で核兵器の使用をちらつかせる。アメリカはイランの核施設を攻撃した。原発の陰に隠された核兵器の問題も忘れてはならない。

山谷を通じた都市下層労働者の運動から、福島原発事故以降、被ばく労働運動へと活動を広げていったなすびさんは、原発に依存するしかなかった現地の実情に想いを馳せる。差別と格差に付け込んだ抑圧システム。それを解体すると同時に、それに代わる生活基盤を共に作り上げるようなプロセスを経ないと、解放される闘いにはならないだろうと語っていた（『季刊運動（経験）35』）。

福島では今、「福島イノベーション・コースト構想」という国家プロジェクトが始まり、復興が謳われている。だが、いったい誰のための復興なのか。五輪は「福島復興オリンピック」から「コロナ復興オリンピック」に簡単に変わり、うず高く積み重ねられたフロンティアの横を聖火ランナーが走つ

た。その映像は絶対に流されることはない（「おれたちの伝承館」に豊田直己の写真あり）。福島はまだに「原子力緊急事態宣言」下にある。福島原発事故は終わっていない。そして敗戦後80年、植民地支配の責任は今もとられていない。「国体護持」から始まった戦後。その延長線上で、福島原発事故を捉える必要性を強く感じている。

（ひらい・ゆみこ／新宿御苑への放射能汚染土持ち込みに反対する会）

◆ 報告 ◆

本誌207号、「本の紹介」で紹介しました加藤宣子著『会社』と基地建设をめぐる旅』（2024年11月刊、ころから）が、本年度の平和・共同ジャーナリスト基金の荒井なみ子賞を受賞しました。

荒井なみ子賞は、主に女性ライターに贈られる特別賞です。おめでとうございます。

編集部